

藤 棚

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

目 次

第 194 号	二年は力を尽くして志を遂げよ (H19.3.24 発行)
第 193 号	平成 18 年度卒業式辞 (H19.3.3 発行)
第 192 号	本校卒業生瀬沼君の論文のご紹介 (H19.2.1 発行)
第 191 号	マクロから入ってミクロに及べ (H19.1.10 発行)
第 190 号	季節の不思議さ (H18.12.21 発行)
第 189 号	バーバリズム考 (H18.12.1 発行)
第 188 号	虐め自殺事件に思う (H18.11.1 発行)
第 187 号	学び方を工夫せよ (H18.10.2 発行)
第 186 号	ギリシャの旅から (H18.9.1 発行)
第 185 号	北朝鮮の危険な傾向について (H18.7.20 発行)
第 184 号	廉恥を重んじよ (H18.7.1 発行)
第 183 号	恐るべき少子化に備えよ (H18.6.3 発行)
第 182 号	肥満を恐れるな (H18.5.1 発行)
第 181 号	入学式辞 (要旨) (H18.4.10 発行)



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

二年は力を尽くして志を遂げよ 一年は本日より戦闘を開始せよ

校長 小川義男

念願の早稲田 20 は、遂に 31 という形で目標を大幅に突破した。これは諸君の努力の成果であると共に、教職員全員の苦闘の賜^{たまもの}でもある。特別自習室の監督として、家庭を顧慮すること少なく挺身してくれた人々、進路の把握、指導に文字通り徹夜して奮闘してくれた若手教師たち、学年部長、教科担任、これらの人々の努力に、諸君と共に深く敬意を表したい。特進コース部長は、文字通り命がけで勇戦敢闘してくれた。ひとクラスで 17 人の早大合格者を出した江藤先生の努力には、改めて畏敬の念を表さなくてはなるまい。部活動の教師たちの進学への協力にも尋常ならぬものがあつた。

早稲田だけではない。今年は MARCH の合格者は相当数に上った。これまで日東駒専は本校の主流であったが、今年はこれが逆転した。日東駒専に対し MARCH の合格者数の方が大きくなったのである。また日東駒専に合格しても、これに進学せず来年更に高みへ向け挑戦する人の数も激増していると聞く。日東駒専も、押しも押されぬ名門大学である。しかるに彼らは、さらにそれをも乗り越えて突き進もうとしている。

一浪で早稲田に複数合格した濱田さんは、昨年、日大のみに合格していた。彼女はこれを辞退し、この春、初志を貫徹したのである。その意志と実行力に心から敬意を表したい。早慶上智クラスと雖も、その入試に天才を要求するものではない。考えてみれば世の中に、努力して達成できぬものなど一つもないのだ。

ここで「老人の回想」を許していただきたい。私が「英語担当の学園理事」として着任したのは平成四年であった。諸君のすべてが生まれたばかりの頃である。当時の本校は亜細亜大学の指定校枠四

人に入ることが最大の名誉とされ、生徒の多くは専門学校、就職を選択する人々が主流であった。推薦、指定校が本決まりになる 11 月には、三年生を、ある種の暗さが押し包んだ。私は前庭で「俺が来たんだから、お前たち、いつまでもそんな思いはさせないぞ。」とつぶやいたものである。一人涙が滲んでくることもあつた。今思えば、我が心に潜む「熱き思い」と言うものだったと思う。

早稲田慶応と雖も恐るるに足りないことを語ったとき、ある女生徒が挙手して立ち、「先生はどうして早稲田とか慶応とか現実離れをした話ばかりするんですか。もっと実態を見た話をしてください。」と抗議した。私は、若者が自らの未来に限定を付す姿に驚き、その夜眠れなかった。

だがその年度の三月に佐野君が立教に、光宗さんが上智に合格した。佐野君は思慮深い好青年であった。光宗さんは、会えばはっとするほどの美人であった。この二人の成果は全校に衝撃波を走らせた。「そうか、僕たちにもやれるんだ。」そのような明るさが全校を包み、生徒たちは破竹の進撃を開始した。「遠くまで行こう」、これは私が呼びかけた、当時の合い言葉である。「思えば遠くまで来たものだ。」これが私の今の実感である。

早慶上智、国立大と雖も、それを突破するに特別の才能を求めるものではない。正しい勉強方法とそれを持続する意志力さえあれば、突破できない大学などひとつもない。そこで私は、来年度の目標を東大 5 国立大 50 早稲田 50 早慶上智東京理科合計 100 に置く。早慶上智東京理科 100 は、いささか小さすぎる目標かも知れない。それを大幅に超過して笑われるのなら、私は喜んで諸君の嘲笑に甘んじよう。

四月からは、自習室 365 日開室を目標に努力する。まだ約束はできないが、そのため努力する決意である。

すでに二年生には知らせてあるが、「早稲田を志す会」も組織する考えである。学年を問わず月二回会合を持ち、合格者や先生方の指導を受ける会である。私も積極的にこれに参加したい。

東大 5 を是非達成したいが、私は諸君に地方国立大にも展開することを求める。東大、京大、東北大、九大、北大、阪大、名古屋大の七つは、旧制帝国大学の流れを汲む、いわゆるビッグセブンとして知られる名門大学である。施設、教授陣等、あらゆる面で恵まれている。特に私は北大を薦めたい。目下入試はそれほど激甚ではないが、すぐれた大学であることは私が保証する。また北海道では、小樽商科大学、帯広畜産大学、室蘭工業大学も、割と入りやすいが、世間に対しては堂々たる名門大学である。私は、国立を目指す諸君が、北海道に進出されることを強く希望する。私の郷里だからではなく、北海道は「進路の穴場」だからである。

国立私立を問わず、センター試験を極度に重視せよ。今や大学入試とはセンター試験の別名だと言い切っても過言ではないほどにセンター試験は重要である。一年生も、解答を見ながらよいから、センター試験問題を五年分くらい解いてみると良い。その中から諸君の勉強方法についての、新しいノウハウが獲得できるのではないだろうか。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

平成 18 年度卒業式辞

狭山ヶ丘高等学校長 小川 義男

諸君のご卒業を心から祝福致します。これまで様々な苦労もあった事と思いますが、諸君は、それに耐えて今日の良き日を迎えました。本当にご苦労さまでした。これもひとえに家族の皆様のご支援あっての事です。その高恩を忘れずこの後も精進して下さい。

今日我が国は極めて難しい国際環境に置かれております。中国は最近しきりに大国主義的傾向を露にし、年間 12 パーセントも、その軍事費を増大させております。人によってはこれを実質 18 パーセントと見る方もあります。平和な時代に、これほど急速に軍事化を進めるなど、歴史にもその例を見ないところがあります。

北朝鮮は、国民の窮乏をよそに核武装を急いでおります。北朝鮮による拉致問題については、特に指摘しておかねばならぬ問題があります。それは、我が国内において拉致が数十年にわたって実行されていたという事実です。北朝鮮の蛮行が許すべからざるものであることは言うまでもありません。しかし、このような犯行を真面目に取り締まらず、事なかれ主義に墮しがちであった当時の政府の行政責任、政治責任は、今日なお厳しく批判されておられません。国家の安全のためにも許し難い問題だと思っております。

イラクにおける紛争は、アメリカ軍に対するテロから、部族間の争いにその本質を変貌させてきております。現在のイラク政府は、人口の三分の二を占めるシーア派を中心とするものでありますが、これに対し、少数派であるスンニ派は、激しいテロ攻撃を行っております。イラクの人々には部族意識、宗派的信念が強く、ヨーロッパ的な多数決原理には馴染みにくいようなのであります。

先日処刑されたフセイン氏は、拷問と連座制等の暴力的支配を恣にして、少数派のスンニ派でありながら、イラク全土を暴力的に統一したかと思われまふ。結局中東は、キリスト教的デモクラシーに馴染む世界ではありません。イラクがどうなろうと、それはイラク人自身の問題であります。すべ

てをイラク政府に委せ、外国はすべて撤兵すべきであると私は考えます。

但し日本としては、アメリカを初めとする国際社会全体の中で孤立しないだけの叡智を失ってはなりません。諸君は修学旅行でセントポール寺院を訪れたことと思います。あの寺院の聖壇の前に、分厚い書物が置かれてありました。それは、第二次世界大戦の折に、ロンドンをドイツの空襲から守るために散華した 26,000 名のアメリカ兵の名簿であります。それを司祭は毎日すべてのページをめくり、イギリス全体がアメリカに負っている恩恵を忘れないように心がけているのであります。英米関係とは、このように深い歴史的事実に裏づけられているのかと思ひ、私は愕然と致しました。

加工貿易国である我が国の宿命から考え、イラク問題に関しても、ただ単に「イラクから撤兵せよ」と叫び立てるのではなく、アメリカが直面する苦悩に十分気配り、心遣いを尽くして、我が国の進むべき道を模索しなくてはならないと思うのであります。

諸君は間もなく成人に達し有権者となります。歴史を振り返り、書物に親しみ、思慮を深くして、卓越した有権者に成長して行って頂きたいのであります。

永く生きてきてしみじみ感ずるのでありますが、人生には引き潮の時と満ち潮の時があります。引き潮の時は何をやってもうまく行きません。満ち潮の時は、やることなす事うまく行きます。しかし満ち潮だけの人生がないように、引き潮だけの人生もありません。失敗続きの時期が長引こうとも、必ず潮の満ちてくる時があります。引き潮の時は、浅瀬でばちばちと焦ってはなりません。次に大きな潮が迎えに来ることを確信し、自らの内面蓄積に努めることが大切であります。やがて潮が満ちてきます。世の中は、真に力量ある者を見捨てたりはしません。大いなる明日の訪れを信じ、力を蓄積していただきたいのであります。

今ひとつ、徳川家康は、「不自由を常と思えば不足なし。足らざるは過ぎたるに勝されり」と申しております。またある能の大家は、「食は足らざるほどに、家は漏らざるほどに」と語っています。奢侈逸楽は決して人間に幸せをもたらすものではありません。不自由を常と思う慎み深さを持って人生を生き抜いていって下さい。

本日は、入間市長木下博氏、県議会議員斎藤正明氏、県議会議員田中龍夫氏をはじめ、多数のご来賓の皆様のご来賓を忝のうしております。ご多忙の中ご列席下さり、卒業生の前途に祝福を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

保護者の皆様、ご覧の通りお子さまは見事に成長されました。ここに謹んでお返し申し上げます。彼らはやがて国家の指導者として、必ずや国民の期待に応えてくれるであります。おめでとうございませぬ。また校長として、皆様の三年間のご協力に、深く感謝申し上げます。

名残は尽きませんが、卒業生諸君、いよいよ別れの時となりました。最後に一言、諸君、親を大切にしてください。親は、今は元気であっても、やがて年老い、衰え、諸君より先に世を去って行くものであります。昨今、国家による介護の名の下に、施設に老人の世話を委せる気風が専らであります。他人が行き届いた世話を老人に施せるものではありません。親の老後に対する第一の責任は、その子供にあるのであります。

子が親を大切に作る気風は、やがて国民の伝統となり、将来諸君の子供が老人となったときにも、彼らを守ってくれるであります。親を大切に、諸君自身は、「若さとは未熟さである」と心得て、これからの人生を生きて行ってください。諸君、サヨナラ。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

本校卒業生瀬沼君の論文のご紹介

校長 小川義男

以下は瀬沼君の論文である。本校の最近の卒業生からは弁護士も出ているし、公認会計士試験の合格者も出ている。多くの諸君が、国民のリーダーとして我が国各界に進出する気配が強まりつつある。

瀬沼君は、私にとっても印象の深い生徒であったが、若くしてその筆力を天下に示した。これは、ひとり瀬沼君だけでなく、卒業生、在校生全体に新たな決意と展望を抱かせるものと思う。今月は私の論文は省略し、瀬沼君の論文を掲載することにした。

「国家」の確立を目指して

第23回土光杯全日本学生弁論大会発表原稿（優秀賞「フジテレビ杯」受賞）
慶應義塾大学文学部2年 瀬沼 直之（本校卒業生）

我が国が「国家」であることを疑う人は多くないだろう。しかしながら、私は現代の日本は真の国家からほど遠い「偽りの国家」であると考えている。そして、偽りの国家であり続けたとすれば、我が国の未来は悲惨なものとなることが予想される。そうした未来を避け、我が国が安定の中に繁栄を続けていくためには、今、我が国を真の国家とすることが必要なのである。

国家は本来、非常に多くの要素が複雑に、そして奇跡的に重なり合って初めて成立するものである。例を挙げれば、文化的な共通性、歴史の共有、共通の利害などがそうである。しかしながら、現代においてはそれ以前に、領土、人民、主権の「国家の三要素」を確立すること無しに、真の国家たりうることはいかならない。その上に先述の要素が重なり結合することで初めて、真の国家となるわけである。これが、「国家の原則」である。

これに我が国の現状を当てはめて考えてみると、我が国は国家として非常に危うい状態にあることがわかる。具体的に考えてみよう。

まず、領土についてであるが、我が国は周囲を海に囲まれているというその地理的特性上、離島をめぐる領土問題が生じやすい状況下にある。また、それに伴って離島の重要性も非常に高いと言える。しかしながら、領土問題に関する意識は決して高くない。これは、一向に解決される気配のない北方領土問題、竹島問題等に対する政府の姿勢、マス・メディアの取り扱い方、国民の世論の低さを見れば明らかである。

人民についても領土と同様に意識が低いと言える。例えば、北朝鮮による拉致問題は最近になり、ようやく注目されるようになったが、発生当初は、政府も多くのマス・メディアもほとんど注目していなかった。いや、意図的に無視してきたと言っても過言ではない。つまりは、「日朝友好」という聞こえの良い言葉を以て、自国民が被害者となった北朝鮮による拉致という重大な犯罪行為を、自国民自身の手で封殺してきたのである。

憲法において、「主権在民」が規定されている我が国においては、人民の人権が他国によって不当に侵害されるということは、国家の主権が侵害されたことと同じなのである。にもかかわらず、人民に対する意識が弱いと言うことは大変な問題であると言える。

主権に関する意識の低さを象徴する事件をもう一つ挙げてみよう。それは、二〇〇二年に発生した、瀋陽日本総領事館への北朝鮮脱北者の駆け込み事件である。当時を思い返すと、「人道」と言う言葉ばかりが取り沙汰され、我が国の主権が不当に侵害されたことを主張する声は非常に少なかったことが思い出される。確かに、彼らが北朝鮮に送還された場合に受けることを想像すれば、なんとか彼らを救いたいという気持ちを持つことは自然なことかもしれない。しかし、そのような考えを前面に押し出し、日本という国家が主権を主張することを悪であるとする風潮が自国民の間から出てきたことは非常に危険なことである。

以上に見てきたことは、ほんの数例ではあるが、そこからわかることは、我が国は一見すると国家の体裁を保ってはいるが、その内実は真の国家とはほど遠い、「偽りの国家」であるという事実である。なぜ、このような状況に陥ってしまったのだろうか。

その答えは、大東亜戦争における敗戦、そしてそれに伴って制定された現行憲法の下に経過してきた、戦後という時間に求めることができよう。

戦後、長い期間にわたって、国家を意識することは一種のタブーとなってきた。国家は、戦争を引き起こし、人民を常に抑圧する悪であるという言説が広く日本社会に蔓延してきたからである。それに加えて、戦争の結果制定された憲法においては、「平和主義」「国際協調主義」が極端に強調され、国家として当然の権利を主張することが制限されてきたのである。

その結果、政府も国民も国家意識が極端に希薄となり、先に述べたように、国の主権、領土、人民が傷つけられても、危機感を持たないような状況が生じたのである。それが、「偽りの国家」としての日本の現状である。

この状況を打開する方法はあるのだろうか。それぞれの問題に対する、個別具体的な策を講じることはもちろん重要ではあるが、それよりもより象徴的な、そして世に強い衝撃を与える策を講じる必要があると考える。その意味で、現行憲法を改正することが必要不可欠なのである。

新たな憲法に盛り込むべきことは多くあるが、最も重要なことは国家の主権、領土、人民を守る手段を明確に定めることである。現行憲法の下では九条において画一的に戦争の禁止が規定されているが、果たしてこれで国家を守ることができるだろうか。確かに、現行憲法の前文に謳われているように、諸国民が公正であって、彼らの信義が信頼できるものであるならば、今の状態を保持しても問題はないかもしれない。しかしながら、そのような保証はどこにもないのである。現に隣国は、我が国に対して一方的にミサイルを発射してくることもあれば、我が国の領海や領土に不法に侵入してくることもある。また、現在は友好関係にある諸外国が、いつどのように変化するかは誰にもわからないのである。それ故に、我が国は自国の領土、主権、人民を守るだけの能力と、そのための法体制を整備する必要があり、その意味で憲法を改正する必要があるのである。

戦後、六十年余りが経過してなお、我が国は真の国家と呼べる存在になっていない。しかしながら、今、真の国家とならなければ我が国の存続は危ぶまれる。六十二年の夏、なぜ、我が国はボツダム宣言を受諾し、終戦を選択したのだろうか。私は、終戦の詔勅の中の「萬世のために太平を開く」と言う文言にその意義は集約されていると考える。今、再びこの文言を取り上げてみたい。

現代の日本が、なぜ真の国家にならなければならないのか。そのためになぜリスクを伴う様々な施策をとらなければならないのか。それは一重に我々の子孫のためである。後の世に生きる人々が、平穏に暮らすことができ、そして何らかの問題が発生しても解決することができる下地を今作らなければならないのである。

萬世のために太平を開かねばならないのである。

そうして、偽りの国家であることに終止符を打ち、真の国家として繁栄していくこと。それこそが、今、日本が選ぶ未来だと私は確信している。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

マクロから入ってミクロに及べ

校長 小川義男

小アジアとは、どのあたりを指すか、諸君は知っているか。それは現在トルコが位置している地域である。北は黒海に、西はエーゲ海、地中海に面する、いわゆる小アジア半島である。アジアという言葉の語源もはっきりしていない。古代アッシリア語またはヘブライ語がその語源ではないかと推察されている。

世界の歴史は中東から始まったと言って過言ではない。エジプトのナイル川、現イラクのチグリス、ユーフラテス川の流域に世界の文明は始まった。そのチグリス、ユーフラテス川の源流はヒマラヤに発しているというのだから、地球は息を呑むほどに壮大である。

当時ヨーロッパなどは、まさに僻遠^{へきえん}の地で、そこには、さしたる文明も存在しなかったのではないと思われる。現在アメリカが、このイラクに深くコミットしているが、イラクが、メソポタミアを中心とする古代文明の発祥地であったことを忘れてはならない。バクダードに栄えたこの偉大なる文明の歴史に、この国の人々は大きな誇りを抱いている。イスラム教とキリスト教の葛藤などという問題を離れて考えても、このように誇り高い民族に、外国が関与するという事は空恐ろしいことなのである。

いずれにしても、世界の歴史、地理に対して深い理解を抱くことなしに国際社会を生きていくことはできない。昨年、全国的に世界史の単位未履修問題が起こった。本校はこれとは全く無縁であったが、それならば世界史に関する教育が十分浸透しているかと言えば、必ずしもそうではない。どこの学校でも、世界史はどちらかと言えば軽視されがちなのである。受験に際しても、手近なところで日本史を選択するという人々が少なくない。

世界史の教科書を開いてみて、それがあまりにも高密度であることに驚く。私でさえ知らないような断片的史実が、これでもかこれでもかと濃密に展開されている。これでは高校生でなくとも途中で投げ出してしまいたくならうというものである。私は教科書が悪いのだと思う。あるいはこれほど高密度の知識を要求する学習指導要領そのものにも問題があるのかも知れない。

そのため、教科書を読んでいると、まるでジャングルの中に迷い込んでしまったような気持ちになってしまう。受験は決してここまで微細な知識を要求しているものではない。私は今「エピソードで読む世界の歴史」というタイトルの本を執筆しているが、世界史に関しても、息抜きしながら読めるような書物が数多く出現するよう期待するのである。

ところがここに、山川の世界史を中心として勉強していく上で、素晴らしいひとつの方法がある。それは各章のはしがきと呼ばれる部分に着目する手法である。私の手元の教科書は十六章に分かれているが、各章それぞれに序文的なあらすじが準備されている。これを16枚のコピーにまとめてしまうのである。

「はしがき」だけだから、これを読んだだけでは微細な部分は分からない。分からなくとも良いから、私はこれを声を出して、繰り返し、繰り返し音読して頂きたいのである。そうして、古代とはいつか、中世とはどの頃か、絶対王政とは、いつ頃どのようにして生まれた、何者なのかというあたりを考えて頂きたいのである。そのようにして、微細な史実に関するインタレストが喚起された後に、本文を読み込んでいけば、山川の教科書も、また一段と身近なものに感じられるのではないかと私は思うのである。

これが私の主張する「マクロから入ってミクロに及ぶ」という学習方法である。

二学期の終業式の際私は、英語の学習では、単文や、ばらばらな単語ではなく、長文に挑戦せよと語った。是非私の考えを受け入れ、長文読解に最大の重点を置いて学習を進めてもらいたい。但し、だからと言って、英文法が全く必要でないと言っているのではない。但しこれについても、「マクロから入ってミクロに及ぶ」姿勢だけは失わないで欲しい。

Crown Readerには、各レッスンの後に必ずGrammarのページがある。これをコピーして綴じ込んでもらいたいのである。1と2の分だけで良い。これを熟読すれば英文法に分からないことはなくなる。後は英文法の問題を解くこと。不明な箇所当たったときは、先ず、先ほどのコピーに戻る。それでなお分からないときに初めて分厚い英文法の参考書を開けばよいのである。英文法の参考書は、辞書代わり程度に使うことだ。

これは文学についても言える。手当たり次第に名作に当たるのも良いが、できれば文学史を読み、その中から関心を抱いた作品について原典に当たるとい手法を用いて欲しいのである。

私はこの目的のために「あらすじで読む日本の名著」を編纂した。諸君は全員これを持っているわけだから、是非このシリーズを活用してもらいたいものである。

実は文学史については、手頃なものが見あたらない。私は今すぐではないが、そのうち「肩がこらずに読める日本文学史」を執筆したいと考えている。

「マクロから入ってミクロに及ぶ」、是非この手法を、学習ばかりでなく君たちの人生そのものにも生かして頂きたいと願うのである。

新しい年も始まった。大きな希望を持ち、未来に向かって突き進んでいこう!



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

季節の不思議さ

校長 小川 義男

「冬至十日前が一番暗い」という。まさかそんな筈はないのだが、夜の訪れが早いこの時期に、春の訪れを待ち望む北半球の人々の心を語り得て妙である。

「世界中で一番住みよいところはどこだろう」若い頃から考え続けてきた。考えてみれば我が国は、冬は寒いと言って嘆き、夏は暑いと言ってこぼす。春と秋が、一番過ごしやすい季節なのかも知れぬ。暑さ寒さと涼しさが併存しているのだから、これこそ世界で最も快適な国だということになるのではないだろうか。

特に埼玉県は地震の被害の少ない地域だそうである。飯能の双柳^{なみやなぎ}、入間の野田は特に地震に強い地盤ということで、全国のコンピューターの本部が移転してきている。入間市に住む私としては心強い。また埼玉は水による被害も極めて少ない地域である。

結局埼玉は世界で一番住みよいところということになるのであろうか。何だか「ネズミの嫁入り」の話のようでいささか恐縮だが、私の「埼玉民族主義」は、このあたりにも胚胎している。「ダサイ」などと言う蔑称を埼玉県民に浴びせるような奴は「ブッコロシテ」やろうか。

ところで季節の変化がどうして起こるかを諸君は知っているか。それは地軸が 23.5 度傾いていることに起因するのである。中学生の「昔」に帰ったつもりで、しばらくご辛抱願いたい。

ご承知の通り地球は太陽の周りを 365 日かけて一周している。その一周する曲線の上に一枚の板を載せたと仮定しよう。それが黄道面と呼ばれるものである。地球の地軸は、この黄道面に対して 23.5 度傾いているのである。

北極のある側(北半球)が、太陽に近づく形で地軸を 23.5 度傾けるとき、これが夏である。逆に太陽にのけぞるような形で、23.5 度遠ざかるとき、これが冬である。

暗闇の中で懐中電灯を白紙に照らしてみると良い。真っ直ぐに、つまり直角に照らせば、照らされ

る面積は最小になるが、明るさは最強になる。逆に平行に近いほど斜めに光を当てて見たまえ。広さは極めて大きくなるが、ある一点の明るさは、うすぼんやりと弱くなってしまふ。太陽熱も同じだ。これが季節の変化が起きる原因なのである。

太陽が地表を直角に照らす地域はあるだろうか。あるとも、あるとも。夏至の時、太陽は北緯 23.5 度の地域を直角に照らすのである。だからこのあたりは、地球で最も強く太陽に照らされていることになる。校長室のデスクには、ガラスの下に世界地図が広げられている。その地図で見ると、北緯 23.5 度とは、例えばハワイ、南鳥島などである。台湾南部もこのあたりに位置する。

常時太陽が直角に照らす地域はない。しかし北緯 23.5 度と南緯 23.5 度の間に位置する地域は、年に二度太陽が直角に照射する。年に二度も直角に照らされるくらいだから猛烈に暑い。それが熱帯と言われる地域なのである。その季節はいつだと諸君は思うか。それこそは春分と秋分である。

地球は地軸を 23.5 度傾けたまま黄道面を移動するから、春分、秋分の二回だけは、太陽から見れば地軸が傾いていないことになる。このとき、昼の長さや夜の長さが同じになることはご理解頂けるだろう。

こんな惑星は珍しい。何か神様が、季節の変化を生じさせるために地軸を 23.5 度傾けておいたのではないか、そんな気さえしてくるのである。

月も考えてみれば不思議な天体である。あれほど身近に天体を見ることができるといふのも、考えれば考えるほど不思議である。双眼鏡で見ても、月の地表の様子ははっきりと見て取れる。月のない夜空は考えただけでも寂しい。

昔北海道の十勝で、星一つない漆黒の闇を歩いたことがある。ビロードに包まれているような、いや自分が黒いビロードになってしまったような感じであった。そのとき学生の私は「本当の闇とは美しいものだ」と思った。しかしそれも、平生は美しい月と、夜空の星に恵まれているからこそ感じたものだったのであろう。

今年も暮れた。それぞれに思いがあろう。三年生は受験に向け緊張の日々だろうと思う。誰もが通った道だ。誰もが通らなくてはならぬ道だ。へこたれたりせず、黙々とその道を進み給え。

間もなく正月。門松を立ておせちを食べると、新しい気持ちが生まれてくる。人々はこのようにして、やがて訪れる春を待った。「冬来たりなば春遠からじ」しばらくの寒さに耐えて春を待とうではないか。

志貴^{しき}の御子^{みこ}の歌に

岩^{ばし}走る 垂水^{たらし}の上の 早蕨^{さわらび}の
萌^いえ出^いずる春に なりにけるかも

というのがあった。垂水とは滝のことである。万葉集に収録されている歌だが、春を待つ心は万葉の昔も変わらなかったのであろう。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

バーバリズム考

校長 小川義男

歳の瀬も迫り、三年生は勉強に追われていることと思う。緊張した日々が続き、心にゆとりを失いがちなこの頃である。しかしまあ、誰もが通過しなければならない峠だ。何とか頑張り抜いて欲しい。

勉強、勉強というのも耳障りだろうから、今日は全く別な話題で書こう。生徒諸君も肩の力を抜いて読んでもらいたい。

私に不思議なものがある。何と理解しようと努力しても、何とも理解できないのである。それはジーパンに「加工」された穴である。

夏が全盛期なのかも知れぬが、冬になっても、穴の開いたジーパンを履いている若者を見かける。あれが北海道だと、まだらな霜焼けになってしまうのではないかと思うのだが、霜焼けと言っても、恵まれた環境に育ってきた諸君には分かるまい。

それにしても、どうしてあんな具合に、ジーパンのあちこちに穴をあけるのだろうか。聞くところに寄ると、新しいジーパンを買ってきたら、石ころと一緒にして洗濯機で洗うのだそうである。確かに石でこすれば、木綿地が適度に柔らかくなり、それなりの風格が出てくるのかも知れぬ。

ところであの穴は、どのようにしてあけるのだろうか。もともとジーパンは、船の帆布として用いられていた布である。三回や五回の洗濯で穴があくような代物ではない。刃物で切った風もないから、石の上に広げて、もう一つの石で叩いて「自然風」にあげたものなのであろうか。すばと穴があくのではなく、横糸が細く太く残ったりした「すだねこ簾越しの月」を見るような物もある。若者はそれぞれ努力しているのだ。「ご苦労様」と敬意を表したい。

しかし、このような穴で私を驚かせることはできない。何を隠そう、かく申す私こそ小学校時代から「穴のあいたズボン」の元祖だったからである。

但し私は、自分から好んでズボンに穴をあけたわけではない。いつの間にかズボンに穴があき、膝小僧が露出するようになってしまっていたのである。「おまえの足には、カミソリでもついているのか」、すぐにズボンをいためる私を、父はこう叱った。衣類が極めて高価な時代だったのである。叱られながら私は、この穴のあいた分の布地はどこへ行ってしまったのだろうと真剣に考えた。

考えてみれば、このジーパンの穴は、ある種の屈折した自己主張なのだと思う。ホームレスと言われる人たちが居るが、あの人たちは決して穴のあいたジーパンを履いたりしていない。穴があいたジーパンを履いているのは、決して生活が苦しくない、一見してそれと分かるような中流家庭の「ご出身」の若者達である。

私の大学時代は、まだ学生服を着、角帽をかぶっている学生が少なくなかった。しかしどういものか、東大の学生には学生服が多くなかった。彼らはラフな服装をしたり、茶色のジャケットスーツを粋に着こなしたりしていた。角帽、制服でないのだから、誰が見ても東大生とは分らない。私は当時日本全学連の中央委員、北海道学連の執行委員長だったので、しばしば上京していたのだが、そのうち面白いことに気がついた。良く見ると、東大生は、例外なしと言っても良いくらい、衣服のどこかに「銀杏のバッチ」をつけているのである。ジャケットスーツの、目立たぬような所であったり、登山帽の横であったりする。ついている場所は様々だが、必ずと言って良いくらい、身体のどこかに銀杏のバッチがくっついているのである。それならいっそ、制服に学生帽という典型的東大生を演じれば良さそうなものだが、それでは彼らの本当のプライドは充たされない。一見「ごく普通の若者」でありながら、仔細に観察すると「実は東大生である」。この意外性が、彼らに取りまことに甘美なものだったのであろう。

かつて旧制高校生にバーバリズムが流行したものであった。旧制高校生とは、旧制中学四年、あるいは五年を終わった後、秀才のみが進学を許される、超エリート校であった。特に四年で高等学校に進んだ者は「四修」と呼ばれ、秀才の名を^{ほしいまま}恣にした。

この高等学校生徒の定数と旧制帝国大学の定数には、ほとんど開きがなかった。だから彼らは三年間、思いのままにドイツ語や文学哲学に親しみ、その輝かしい未来に備えたのである。

ところが、この超エリート達は、乞食と見まがうほどに粗末な服装をするのが常だったのである。先ず制帽の天井には穴をあける。そこからぼさぼさの髪が露出している。学生服も、いつ洗濯したか分からないような汚れ方のように、「見える」ように汚してある。そして必ずマントを着、腰に薄汚れた手ぬぐいを長く垂らし、足駄を履いて大道を闊歩したのである。

育ちの良い、旧制中学では秀才の誉れ高かった先輩が、このような服装をして街を歩いているのだから、後輩の私たちは驚いた。しかし、どんなに薄汚れた格好をしているからと言って、旧制高校の生徒であることに違いはない。道行く人々はみな、敬意と尊敬の思いで振り返ったものである。自他共に許す英才でありながら、「浮浪者もどき」の服装をするとは何事か。微笑ましく思いながらも、私はこのバーバリズムに、何か底深い嫌らしさを感じずにはいられない。

彼らはやがて、東大その他の帝国大学に進む。その途端、こざっぱりした学生服にスプリングコートを着込んで、青年紳士として振る舞った。頭にはテカテカにポマードが塗り込まれているのが常であった。

けちをつける積もりはない。常に目立たねばならぬ若者は、若さを楽しみながらも、なかなか気苦労が絶えないものだなとお察しする。

でも穴だらけのジーパンも、このバーバリズムも、何かしら、そこはかとない嫌らしさを含んでいるように、私には思えてならないのである。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

虐め自殺事件に思う

校長 小川 義男

北海道滝川市と言えば、私が小学校一年から高校三年までを過ごした土地である。私は「滝川第一小学校」の卒業生だが、その小学校の後輩が自殺したのかと驚いた。しかし実は「江部乙小学校」の生徒であつたらしい。江部乙は、合併で滝川市に吸収されたが、もともとは、「江部乙町」という独立した町であつた。りんごの名産地として有名な町である。

六年生の女の子が、いじめを苦にして自殺したという。可哀想でならない。しかし私が先ず第一に思うのは、「死ぬほど辛かったのなら、学校を止めてしまえば良かったではないか」と言うことである。学校は大切な所ではあるが、命と引き替えにするほどのものではない。「学校がナンボノモンジャ」くらいの気概を持って欲しいのである。

私も中学一年の時、死ぬほどのいじめに遭った。私は旧制の中学校に進学したのだが、そこに「樹徳会」という組織があつた。ある卒業生のお寺に集まる、滝川市在住の中学生による集団である。その「樹徳会」が、生徒の集まりで、小指を切つて血を出させ、それを集めて「壮烈樹徳会」という血書したたを認めた。私が入学する前年度のことである。久保君という同級生からそれを聞いた私は、「そんなものは不良の集まりだから、参加しない方がよい」と久保君に語った。久保君が漏らしたのか、別のルートから漏れたのかは分からぬが、それが「樹徳会」の先輩の耳に入った。

当時の旧制中学で、上級生の恐ろしさは言語に絶するものであつた。それを知らぬ私が不用意に漏らした言葉は、それ以後「樹徳会」先輩達の大変な怒りを呼ぶことになった。別に殴られたりしたわけではないのだが、町で出会う上級生達が私を呼び止め、厳しく詰問、叱責するのである。ある時など、三人の先輩にとがめられている折りに、私の父が通りかかった。父はその三人の後ろにじっと立って彼らに圧力を掛けた。父は「喧嘩の名手」だったから、三人の先輩など「抜く手も見せず」叩きのめすくらいのものであつたのだが、私は、災いが父に及ぶことを恐れ、大人しく先輩の理不尽な叱責に耐えた。このような分子の力など、決してそれほどのものではないのだが、中学生や小学生には、

彼らが異常なほど大きな存在に見えるものなのである。

事実今の学校の実情では、暴力中学生や高校生は、「少年法」に守られていることを確信しているから、暴力団より恐ろしい。特に中学生は義務教育期間だから退学にも停学にもならない。何をやらかしても、教師に殴られる心配は絶対ない。そんな社会背景の中で、滝川市の小学生も、自らの命の代償によってしか、仲間への不正に抗議できないと思ひ詰めたのであろう。

その間教師はどこにいたのか。何をやってたのか。結局いじめは、教師の存在感が希薄化していることに本当の原因がある。

考えてみれば、同一年齢の集団で構成されている「学級」とは、もともと異常な集団なのである。他の動物にこのような集団はない。同一年齢集団は、学習を効率的に進める上では、効果的なのであろうが、集団内に問題が発生したときには、子供達のみで問題を解決することはできない。小中学生の過度に「自治的な」集団は、結局ボスの発生を許し、学級内にボス支配が跋扈はつすることになる。

しかしそこに「教師」という成熟した世代の人間が一人加わることによって、「同一年齢集団」は、急速に正常性を回復する。教師のいない学級などは、実は学級ではないのである。

ところが、その教師の存在感が急速に希薄化している。「子供と友達のような先生」こそ理想的教師像だとする考えが、今の世の中で、特に学校教育の世界で支配的になってしまっているからである。

ある医師が集団健診で小学校を訪れた。騒がしくて聴診器の音が聞き取れない。子供達は自由に立ち歩いている。そこに三十前のきりつとした教師が入ってきた。彼こそこの「不逞集団」を戒めてくれるだろうと医師の胸は高鳴った。ところがこの教師の口から出た言葉はこうであつた。「ねえ、お友達いい。静かにしようよ。」子供達はさらにかしましくなり、医師は足取りも重く、この学校を後にした。

小学校の一年生が、参観日に、上履きのまま机に上がり、中には教室内を走り回る者もいる。教師が制止しても状況は変わらない。「子供は変わった」「今の家庭での基本的しつけができていない」などと、校長、「教育委員会」はうそぶく。

何、そんなことがあつたのか。私なら、参観日であろうが何であろうが、その中の「一番悪いやつ」の襟首をつかまえて、大音声だいいんじょうに叱りつけながら引きずり回す。小学校一年生に、舐められるようなざまで教師が務まるか。変わったのは子供ではない。存在感を以て子供に接することのできる教師がいなくなっただけなのである。

誰がそんな教師を育てたのか。敢えて大胆に言おう。そのような教師を育てたのは、「叱つてはならぬ、怒鳴つてはならぬ。怒つてはなぬ。子供は褒めよ、褒めて褒めて褒めぬけば、必ずよい子が育つ」とする、奇妙きみょう奇天烈きてんれつなイデオロギーそのものである。これこそは、最近の文部科学省、教育委員会が口を揃えて強調しつつある主張にほかならない。教育系大学の学者諸君が、そのイデオロギー的パトロンであることも、論を待たない。

事件が起こったときの、校長、教育委員会担当者の、責任回避的発言の何と見苦しいことであろうか。このような人々が、教育現場を指導しているのだと思えば情けなくなる。虐め自殺事件の真犯人は、意外なところに隠れ住んでいるのかも知れない。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

学び方を工夫せよ

校長 小川義男

廊下である女生徒が話しかけてきた。「校長先生、朝の通学電車で、勉強しているのはみんな狭山ヶ丘の生徒なんですよ。」彼女が嬉しかったのか、私を喜ばせたかったのか、それは分からない。しかしそれは、私に取り近頃嬉しい情報であった。

しかし私には気になることがある。それは、狭山ヶ丘の生徒諸君が、自分の勉強方法について十分工夫を凝らしているだろうかと言う点である。

一日は二十四時間しかない。これくらい万人に共通、公平なものはない。どんな金持ちでも、これを一日あたり五時間ほど買い増すことはできない。人間に生まれながらの能力差などないのだから、成功するか、そこまで達しないかは、熱心に努力するか否かにかかってくる。

その方法は三つであろう。

- ① 集中力を強める
- ② 睡眠時間を減らす
- ③ 勉強方法を工夫する

睡眠時間を減らすのは論外である。とても長続きしないし、健康も害する。起きている間の集中力を減殺し、「起きていながら寝ている」実態に結びつきやすい。

結局、集中力を強め、勉強方法を工夫すること以外に、諸君の選択肢はあるまい。集中力については、別の機会に譲る。今日は勉強方法について述べたい。

麻布 開成のような進学校では、先輩から後輩へのノウハウの伝承、継承が密に行われているらしい。狭山ヶ丘に、その萌芽は見られるが、まだまだ本物ではない。このあたり、当面は、諸君自身が工夫、作出して行かなければならないのである。

英語で丁寧に単語帳を作ったりしているのを見かける。手作業はまことに楽しいが、それは手足を

動かすことがもともと人間に取り楽しいだけでなく、思考密度が低いという点でも、楽しく長続きのする活動なのである。しかし、単位時間あたりの学習効率はきわめて低い。こんなことをやっていたのでは、気休めにはなるかも知れぬが、とても短期間に実力を蓄積することはできない。

学習に当たっては、今自分が、いかなる力をつけようとしているのか、何を学び取ろうとしているのかを考えてほしい。例えば、英語の読解力は、いかにすれば身につけられるかを、自分なりに深く考えてみるのである。

英語科の有元先生は、私も心から尊敬している先生である。彼は東大を卒業して自衛隊に就職した。その後アメリカの大学院に入学し、帰国した後は自衛隊の高級幹部として、作成されてくる英文を最終的に点検する立場にいたというのだから、その英語の実力には驚くべきものがある。彼が東大特講を担当しているのだから、成果の出ないはずがない。そんな素晴らしい先生を本校は擁しているのだから、諸君は、できるだけこの先生に接触してご指導を仰ぐようにしなければならない。その人格の及ぼす薫陶も尋常ではないはずである。

その有元先生が、英語学習に当たっては、教科書の徹底的学習が最も効果的だと言っておられる。彼はおそらく、このような基礎基本を大切にする学び方で、東大入試を突破されたのであろう。

受験参考書には、気をつけた方がよい。著者には莫大な印税が入るのだから、彼らはどうしても売れる本を書くことに力点を掛ける。予備校の場合もそうである。沢山生徒を集められる先生の給料は、諸君では想像もできないくらい高いのだから、その授業は、どうしても人気が出るように、面白く、生徒を長時間惹きつけられるよう配慮する結果になりやすい。このあたり、地味で基礎基本を重視する教科書の完全マスターに専念せよと言われる、有元先生のご指摘は、極めて重いのである。

理科、数学の学び方については、私には分からない。しかし「人材雲のごとき」本校の理数教員陣容である。理数の細かい点について質問するのではなく、学び方そのものについて、これらの先生のご指導を仰ぐよう、お薦めする。そもそも秀才とは、勉強の個々の点については質問しないものである。私は秀才ではなかったが、高校時代、細かな点について、先生に質問したことはない。

国語、社会については、私自身社会科教師であり、いろいろ述べたいこともあるが、ここには割愛する。しかし、国語、社会の学び方について、一度適当な先生にレクチャーして頂く機会は設けたいと考えている。

論文の書き方については、いずれ私自身が、全校生徒を対象にレクチャーを行うつもりである。

論文については、諸君に、日記をつけること、手紙を書くことをお薦めしたい。日記は、文章力をつけるだけでなく、精神の安定をも生み出す。ノートに丁寧に書くよう心がければ、漢字の練習、書写の練習にもなる。昔「陸軍幼年学校」(中学二年生の年齢の生徒を集め、軍の最高幹部を育成した超エリート学校)では、生徒全員に毛筆で日記を書かせた。そう言えば、本校の東大特講では、学級日誌は英文で書くことになっている。

秋風が快い。「燈火親しむの候」である。クーラーも暖房もなしに、ゆっくり読書できる季節は、そんなに長くはない。自分が自分の先生になったつもりで、自分が何を伸ばしたいかを考え、そのため最善と思われる学習方法を確立して頂きたいのである。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

ギリシャの旅から

校長 小川義男

十日ほどギリシャを旅してきた。世界史に関する著書を書いているので、ひと目見ておきたかったのである。

ギリシャは暑かった。猛暑である。だが日陰にはいると一気に涼しくなる。東京の夏が過ぎにくいのは、気温と言うよりは湿度のためであることを痛感させられた。だからギリシャ人の家ではクーラーを使わない。風が通り抜けるよう工夫して家を建てれば、暑さの中でも快適な日々を過ごすことができるのである。

外国を訪れる度に強く考えさせられるのは、自分が知識的に貧困だと言うことである。「バルカン半島」と言っても、直ぐには地形や、そこにある国々の名前、位置が浮かんでこない。記憶力の良い時代にしっかり覚えておくのだったと思うが、今からでは間に合わぬ。

戦前の教育も、根底を流れる理念は児童中心主義だったと思うが、それにしても必要な知識を記憶させようとする点で、当時の教育は徹底していた。1945年の敗戦、新教育理論の導入に伴って、「詰め込み教育」が厳しく批判されるようになり、知識を記憶させることは何か悪いことのように考えられがちであった。しかし知識なしには思考力も存在することができない。我々はこのあたりで、何か根本的な間違いを犯してきたのではないだろうか。

私にひとつの夢がある。実現することは難しいかも知れないが、諸君に世界の白地図を渡すのである。世界でなくとも、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米等に分けられたものでも良い。それに国名を書いて提出させるのである。これを十回、二十回と繰り返す。そうすれば諸君の頭には、自ずと世界地図が描かれていることになろう。このような知識なしに国際感覚を養うことなどできないと私は思うのである。もっとも、校長が望んだからと言って容易く実現できるような課題ではない。しかし実現できれば、世界に対する諸君の感覚はぐんと拡大されるのではないかと思うのである。どんなものだろうか。

遺跡を歩いているうちに、ガイドがギリシャ神話の話をする。その中にアガメムノン（トロヤ戦争の折のギリシャ軍の指揮官）の話が、しばしば出てきた。アガメムノンについて聞くのはこれが初めてではない。実は私の高等学校時代、時折クラスに現れる校長が、話をすれば、必ずこのアガメムノンの話ばかりしていたのである。面白い話ではなかったが、彼はそれ以外の話はしなかった。遂に、この校長のあだ名はアガメムノンになってしまった。

彼は帝大(今の東大)の卒業であった。当時高等学校の先生には様々なハイアラーキーがあった。ひとつには小学校の先生が「文検」という試験を受けて旧制中学校、女学校の先生になってきた人々である。いわゆる実力グループであった。この人々は、例えばチョークだけを携えて教室にやってくる、生物の先生なら、精細な蛙の解剖図を、地理の先生ならアメリカ五大湖の地図などを、ため息が出るほど見事に描いて見せた。指導事項のすべてを諳んじていたらしいのである。

旧制高等師範学校 文理科大学 帝国大学を出た先生もいた。この人々には字の下手な人もおり、授業もあまり上手でない場合が見受けられた。しかし、歳月を経て考えてみると、やはり後者の方々の授業の方に、味わい深いものがあったように思う。帝大卒の先生の授業で、教え方の巧い人には会ったことがない。しかし幾十年を経て振り返ってみると、どうもそこに、何とも言えぬ深みがあったように思えてならないのである。

ギリシャでアガメムノンの話を聞くにつけ、私はあの「アガメムノン校長」を思い出した。彼は私などでは想像も及ばぬほど豊かな学殖^{がくしよく}を有していたのであろう。懐かしく感じると共に、あの頃、なぜギリシャ神話をもっと沢山読んでおかなかったかと後悔されてならなかったのである。

自我の強い時代、自己主張と我が儘の目立つのが高校時代である。親や教師を踏み越え、乗り越えて行かねばならぬ世代であるだけに、それはまことにやむを得ない。しかしそれにしても、何故もっと幅広く読書に励んでおかなかったかと後悔されてならない。

ギリシャの様々な遺跡は、古くて三千年前、多くは二千五百年前のものである。それはそれなりに大きな感動を呼ぶが、それらの壮大な遺跡に立って、私の思いは別なところにあった。「三内丸山」は五千年前の遺構である。それは高さ数十メートルに達する一大木造建造物であり、全国を周遊するほどの航海技術を有していた。

花粉の化石から判断するに、栗の植林、栽培も行っていたらしい。同じぐらいの大きさの蛤のみが出てくると言うから、これらは交易用の商品として生産されていた物であろう。遺構からは翡翠も出土している。翡翠は、富山県の糸魚川周辺からしか出土しない。他に一、二の例はあるが、いずれも交易に用いられたことはない。さすれば、五千年以前の祖先は、富山まで航海して来て交易を行っていたことになる。このような大航海の末に、我が国を大八州^{おおやしま}と呼ぶようになったのであろう。エジプト第一王朝の時代である。

古代オリエント、黄河流域、そして日本。このような地域に比べれば、ある意味でヨーロッパは後進的地域だったとも言える。チグリス、ユーフラテス川の流域に、世界最高の文化を形成した人々、それを承継するイラクの人々のプライドも理解できるような気がする。

底の底まで透き通るエーゲ海の水の美しさに驚嘆しながらも、私は敢えて我が民族の歴史の古さ、偉大さを嘯みしめてギリシャの地をパリに向け飛び立ったのである。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

北朝鮮の危険な傾向について

校長 小川義男

今回のテポドン等七発のミサイル発射は、現在言われ語られている以上の危険を我が国にもたらすのではないだろうか。

北朝鮮は現在も経済的危機にあり、国民の中には餓死する者さえ発生している。このような経済状況打開のため、北朝鮮は偽ドルを作成し、甚だしい場合は外交特権を利用してこれを世界に流出させている。覚醒剤その他麻薬「輸出」にも、国家機関が手を染めている形跡がある。

過日 PTA 研修で横浜の赤煉瓦館を訪れたが、そのごく近くに海上保安庁の施設があり、その中に、北朝鮮工作船が展示されていた。平成 13 年 12 月 22 日、北朝鮮の特殊工作船は我が国領海を侵し、恣意に行動する中で、海上保安庁の警備艇に停止を命じられた。彼らは命に従わないばかりか反抗の姿勢を見せた。よって我が警備艇は、通常人が存在することの少ない船首及び船尾に、機関砲の一斉射撃を行った。航行不能に陥った彼らは、なおも我が方の指示に従わず、自爆、自沈した模様である。事の重大性に鑑み、政府は同工作船を引き上げたが、船名を偽る装置ばかりか、この工作船には小型の動力工作船を収納する秘密の設備さえ設けられていた。

このような特殊工作船は他にも多数用意されており、これによって覚醒剤、偽ドル等が大量に我が国に持ち込まれているものと思われる。おそらく拉致事件も、このような工作船によって引き起こされたものであろう。

拉致事件について、世間の気づいていない問題がある。拉致は、北朝鮮政府の直接的指示で行われたものだから、その最大の責任は北朝鮮にある。しかし、だからと言って、多年にわたり百人を超える自国民が拉致されることを許した国家責任、治安機関の責任を忘れてはならない。治安機関が、これらの拉致被害に気づかなかったはずがない。政府にその報告が届いていなかったはずがない。歴代の政府は、何故このような被害事実を表沙汰にしなかったのであろうか。この点が問題にされることなく、北朝鮮にすべての責任を転嫁する現在の状況は、決して健康的なものではないと私は思うのである。

北朝鮮は、ミャンマーのラングーンで、ミャンマー政府の要人多数を爆殺した。犯人は北朝鮮正規

軍の将校である。また北朝鮮は、特殊工作員を送って大韓航空を爆破した。犯人のキムヒョンヒは、美しい女性であったが、捕えられて現在は韓国で生活している。

このような無法国家が、我が国全土を射程圏に収めるテポドンその他のミサイルを発射した。その数は七発である。北朝鮮の動向から考え、これは七発に止まらないであろう。

人々はこれを、北朝鮮に加えられた様々な制裁措置に対する外交的反撃であると捉えている。しかし私はそうは思わない。北朝鮮は、その非妥協的政治姿勢をデモンストレイトするための手段としてではなく、現実にも有効な「砲艦外交」のひとつとしてテポドンを発射したのではないだろうか。

北朝鮮にはすでに 20 発以上の核弾頭が用意されているとの情報もある。国民が餓死するような経済状況において、これ以上の核武装増強が可能であるかと疑う人もいる。しかし、ベネズエラの大統領は金正日と会い、ミサイルを購入する折衝を進めようとしている。今や核兵器、ミサイルは、北朝鮮のうまい味のある戦争産業として、その軍事経済を支えようとしている。核兵器を保有して自国の威信を高めようとする国家は決して少なくない。それは、世界的規模で核を拡散させるばかりでなく、北朝鮮の軍事化を推し進める経済的背景を為すという意味でも、世界平和に重大な脅威を及ぼしつつあるのである。

北朝鮮は、炭疽菌その他の細菌兵器 1 トンを保有していると伝えられる。数発のミサイルにこれを積み込み、我が国に向けて発射した場合、我が国民の半ば以上は死滅し、その後蔓延する治療不能な細菌の故に、我が国民のほとんどを死滅することであろう。

このような場合、日米安全保障条約は、果たして有効に機能するであろうか。自国の安全が絶対確実であることが明らかな状況で、アメリカは、自国民の犠牲を覚悟の上北朝鮮を先制攻撃するであろうか。おそらくアメリカは、我々の信頼に応えてくれるであろうが、そこに絶対の保障はない。

北朝鮮によるこのような攻撃が行われる場合、必ず我が国内に「親北朝鮮的臨時政府」が秘密裏に組織されているのが普通である。この臨時政府に、「政権を譲ればよし、さもなければ日本人の過半数を殺戮する」と脅迫された場合、果たして時の総理大臣は、これを峻拒する精神的強靭さを保有しているであろうか。

もしこのような要求に政府が屈服し、政権を奪った臨時政府が、北朝鮮軍の侵入を許した場合、殺戮、レイプ、略奪は恣意に行われ、言論は完全に統制され、逆らう者には徹底した拷問、拘禁が待っているであろう。強制収容、強制労働等の責め苦は、きわめて日常的傾向となるであろう。民族のこのような悲劇は、千年の長きにわたって継続するものと思わなければならない。

国連安全保障理事会は、この度のミサイル発射を厳しく戒めたが、この種の国際紛争において国連が大きな役割を果たせるものではないことは歴史の教えるところである。

我々も北朝鮮の暴挙に対する有効な対策を準備しなくてはならない。

おそらくそれは、核抑止力を保有する以外にないであろう。北朝鮮が我が民族を破滅させる暴挙に出るならば、数時間後に北朝鮮自身をも蒸発させてしまうに足る核抑止力を持つ以外に、我が国の安全を守る道はあるまい。

想像に絶する北朝鮮の暴挙である。我々の幼子たちの安全を守りきるためには、我々も又想像に絶する対抗策を確立しなくてはならないのかも知れない。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

廉恥を重んじよ

校長 小川義男

少し昔教師は、日常頻繁に「廉恥を重んじよ」という言葉を口にした。小学生も五年生くらいになれば、その意味をほぼ正確に理解していた。広辞苑によると、廉恥とは「心が清らかで恥を知る心のあること」とされている。

「世間様に顔向けできないようなことはしてはならない」「そんなことをしたら家の恥になる」我々の幼い頃、「耳にたこができるほど」聞かされた言葉である。

最近、悪事の限りを尽くして、これを恥としない奇妙な若者が出現するようになった。「超一流大学」の学生が書店で万引きしたので捕まえた所「返せばいいんだろ」と開き直ったと言う。彼には「廉恥」の心が完全に欠落していたのである。「では警察に引き渡すから、不満はそこで述べたらいいだろう」と突き放したら、彼は瞬間に「改悛の情」を示し平謝りに謝った。しかしそれは打算から出たものであって、廉恥の情に発するものではない。自分さえよければというこの男のエゴイズムが、身過ぎ世過ぎとして屈折した形で貫徹されたものにほかならない。本当に嫌らしい男である。

もっと嫌らしい男がいる。三十歳の男性に二十三歳の妻がいた。「七つ違いは泣いても添え」と言う。適度の年齢差のあるふたりは、深く愛し愛される仲だったであろう。夫の留守中に十八歳の暴漢が侵入し、その妻を犯そうとした。妻は果敢に抵抗し、その果てに殺された。そばに生後十一ヶ月の赤ん坊がいたが、容易ならぬ事態を幼いなりに感じ取ったものであろう。母の遺体に取りすがって泣き叫んだ。暴漢はその赤子を床にたたきつけ、なお絶命しないと見ると、その首を絞めて殺した。この男には人間らしい血も流れていなければ、世間に対し恥じるという気持ちもない。何と嫌らしい男であろうか。

昔は「鋸挽の刑」というのがあった。凶悪な犯人を首だけ残して土中に埋める。首のそばに竹製の鋸を一本置いておき、通行人に竹鋸で一挽きずつ挽かせ、犯人は苦しみ抜いた末、数日後に絶命したと言う。勿論こんな事を今やれと言うのではない。しかし鋸挽の刑を想起させるほど、この犯人の蛮行は許し難い。

しかるに地裁、高裁の段階でこの男は、少年であることを理由に懲役二十五年の判決を受けていたという。しかしさすがに最高裁である。これは死刑を持って臨むという見地に立つべきだという事を明らかにし、高等裁判所に差し戻した。一刻も早く死刑判決が確定しなければ、若妻も、その子の魂も成仏できまい。憎んでも憎んでも許すことのできない蛮行である。

このような男は、常に自分のことしか考えず、他人の痛み、苦しみなど全く理解できない。絞首刑を数分後に控えて初めて彼は、「他人の痛み」を初めて理解するのではあるまいか。

出張で武蔵藤沢から電車に乗ったが、すでに四人の女子高校生が、向かい側の席に座っていた。女生徒にしては物静かで話し声すら立てない。「はて」と注視すると、四人が四人とも A4 サイズの鏡を取り出して化粧に余念がないのである。様々な小道具があるらしく、鞆からそれらを次々に取り出して、入念にその顔面に工作を施す。表情は真剣そのものである。「工作」を終わった後、彼女らは鏡をしまうのではなく、工作完了した自らの顔に入念に見とれ始めた。正面から、斜めから、およそ考えられるあらゆる角度から、彼女らは自らの顔に対するナルシズムに浸っている。「意地悪じいさん」の一言を付け加えるなら、電車の中で化粧する女性は、例外なくブスである。これは差別用語かも知れぬが、この場合あえて使わせてもらっても絞首刑にはなるまい。

化粧は考えてみれば、男性獲得を目指す女の戦いである。悪いとは言わないが、戦いの準備くらいは、人目を避けて密室でやってはどうか。密室とまでは言わぬまでも、さり気なく素早くこれをこなすくらいのデリカシーは期待したい。ここでも彼女らに「廉恥の情」は完全に欠落している。要するに色気がないのである。この化粧は池袋に着くまで四十分間続けられた。もしかしたら始発からずっと作業を継続していたのかも知れない。まあ「現代の化け物」と言うところであろうか。

電車の戸口付近に、床に腰を下ろしへたり込んでいる若者がいた。別段体が悪い様子でもない。我が儘放題、気楽放題に生きてきた所産であろう。その体軀もカップラーメン育ち独特の肥満体である。表情には抑制の気配が全くない。自堕落、やりたい放題に生きてきて、今ある自分を、世間はそのまま無条件に受け入れるべきなのだという我執が全身に溢れている。こんな嫌らしい男も近頃しばしば目にするようになった。ここでも、他人の目を意識するような気配は全くない。「廉恥の情」など彼にはないし、その意味も知らないだろう。彼は生涯、世の中にそんな言葉が存在すると言うことも知らずに人生を終わるのではあるまいか。

路上で本校の生徒に出会って、しみじみ感じさせられるのは、彼らには誇りがあるという事である。その表情はきりりと引き締まって美しい。ひとりひとりの心に、「今の私はこれで良いのだろうか」という抑制が効いている。

体育祭の折、リレーで優勝した三年男子が、本部席に来た。賞状を受け取るため礼をしたとき、その顔面に浮いていた汗がバシッとばかり下に流れ落ちた。直って直立したとき彼の目には涙が浮いていた。しかし彼はその涙を抑制したかったのであろう。努めて平静を装うとした。その瞬間、私は彼に男を感じた。これこそは人間の極限の美しさだと思った。

親ばかと笑われるかも知れない。しかし私は、常に抑制を失うことのない本校の生徒達に、この国の未来を感じ取るのである。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

恐るべき少子化に備えよ

校長 小川義男

出生率 1.25 の時代が始まった。親は二人いるわけだから、人口は 0.5 ずつ減っていくことになる。一所帯あたり約四分の一の減少である。地球全体では、なお人口急増が問題になっているのだから、マクロに見ればこれは好ましいことであるのかも知れない。しかし老年人口の急増と、労働力人口の急減は、予想を超える困難な問題をもたらすことであろう。長期的には人口減少を目指すにしても、もう少し軟着陸する方向を模索しなくてはならない。

少子化の最大の原因は何だと諸君は思うか。私は教育費の過大負担ではないかと考えている。諸君自身、中学校時代に、どのくらいの月謝を学習塾に納入しただろうか。詳しい調査はないのだが、月額 3 万円から 5 万円というのが最も一般的なケースのようである。

義務教育費無償が叫ばれて久しい。確かに小中学校は完全に無償になった。それどころか教科書さえ無償で支給されている。義務教育は完全に無償になったが、学習塾に年間数十万のコストがかかるというのでは、子供もうっかり作れない。仮に四人の子供がいたとする。塾に毎月 20 万を支出しなければならぬとしたら家計が破綻する。結局、大人数の子供は育てられないということになってしまう。

この学習塾にかかる経費は、本来全く必要でないはずのものである。現に狭山ヶ丘高等学校の生徒で、予備校に通っている人は絶無に近い。昨年のごく少数の通塾生がいたが、彼らはいずれも大学入試に失敗した。ある水準の進学指導を受けながら、なお「学校のはしご」をやるようでは、結局虻蜂取らずという結果に終わってしまうのである。

その意味で、公立学校の教員には重大な責任が負わされている。「資格は学校で、学力は学習塾で」という声が存在することを、自嘲的に語った教師がいた。指導力に富む熱心な教師である。文部科学省は「義務教育制度の死守」などをつまらぬところで張り切るのではなく、国民全体が学習塾に支払っている総支出でも計算したらどうか。公立学校の教育が、保護者や生徒に不満を抱かせない程度に充実していれば、学習塾など存立し続けられるはずがないのである。

義務教育において、学習塾に金を支払う必要がなく、名実共に教育費が完全に無償であるならば、家計はどれほど救われることであろうか。このことは少子化問題の解決に直結してくると私は思うのである。

学習塾には、実力のある魅力的な先生が揃っている。この人たちをこそ、学校は教員として迎え入れるべきではないか。現状のままの公立学校では、只いたずらに金を無駄遣いすると批判されても仕方あるまい。

今ひとつ、晩婚化傾向を挙げることができる。男女は一定の年齢に達したときには結婚するのが当たり前である。この慣習が否定される時、人類は滅亡するのだ

しかし今、適齢期などという言葉が安易に使ったら、場合によっては「セクハラ」なる問題に発展しかねない。しかしやはり、ある理想的年齢を念頭に置き、それを尊重して男女が家庭を築くことの尊さは、日常生活の中で不断に指導されなくてはならない。

人はいつまでも若く美しく逞しいわけではない。やがて必ず、年若い、衰え、醜くもなっていく。そのときになって配偶者を求めても、中々結婚のチャンスなど求められるものではない。「芳紀まさに二十歳」という表現がある。匂い立つような女性の美しさを讃えた言葉である。内親王様が三十六歳で結婚されたというニュースが伝えられたが、宮内庁は一体何をしていたのであろうか。あれほど美しく気高いお方が、結果的に晩婚であらせられたと言うことは、もったいなく、また畏れ多い次第である。皇族の方々には、是非早婚の模範をお示し頂きたいと私は願うのである。

「独身貴族」を謳歌する人がいる。親の面倒を見なければならぬからと結婚を遅らせる女性もいる。だが、友達の多くが子供に囲まれ、父として母として慕われている様子に接して、寂しさを感じない人間など存在しない。子供のいない私は、デパートで「父の日の贈り物」などという張り紙を見たりすると、やはり一寸寂しい。それはそれで耐えて行くべきものであり、ここはしっかりと踏ん張って行かねばならないが、教え子達にそんな思いをさせることは、できるだけ避けたいと私は思うのである。

コンビニがあり、出来合の食品が氾濫し、外食にも不自由しないこの頃であるが、やはり家庭で、セレモニーとしても確立した食事は、かけがえもなく尊いものである。結婚が種としての人類にとっても、諸君自身の私生活にとっても、どれほど尊いものであるかを深く理解してほしいのである。

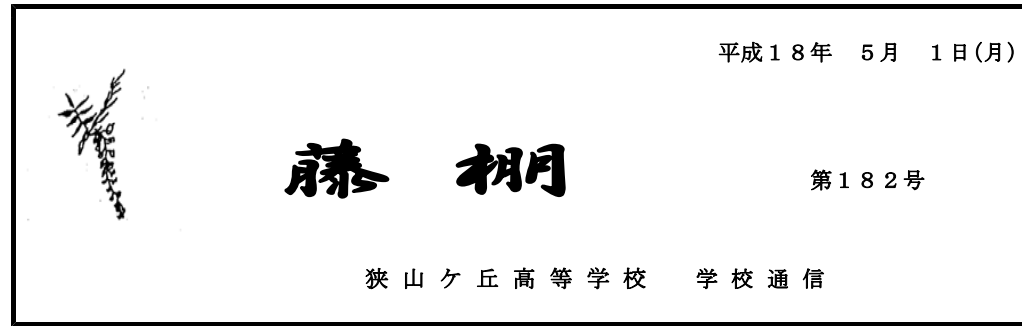
最後に、子供を産むことの尊さを、政府、自治体、教育委員会、学校が強調するよう求めたい。「生む、生まないは個人の問題」などと冷たく突き放したり、人権問題にされることから責任回避したりするのではなく、出産、育児がどれほど尊いものであるかを、理念的にもっともっと強調してもらいたいのである。

「子供を産めるような国に」などと叫ぶ政治家や活動家がいる。だがこの国がどうして子供を産めない国だと言うのか。豊かさの中で贅沢の限りを尽くしながら、「極楽とんぼ」を決め込むのも大概にしる。少子化問題解決の本質は、そんなところに存在してはいない。

ゼロ歳保育の施設を増やすという、小泉総理の考えにも私は反対である。乳飲み子は、目覚めたとき、常にそこに母親の笑顔が待っているという環境で育てられなくてはならない。諸外国にもゼロ歳保育の施設などごく稀にしか存在しない。

むしろ私は「育児休業」を、無償で良いから、新生児出生後二十年間認める制度を確立すべきだと考えている。

老人介護を、介護施設に丸投げしようとする「介護保険」にも私は反対である。老人の世話は、先ず第一にその子供が責任を負わなくてはならない。三世代が同居して、芽生える者、滅び行く者が、互いにいたわりあい励まし合っていくことこそ、真に人間らしい暮らしではないのか。少子化、老人問題、この二つの重大なテーマを巡って、今の政府の政治姿勢は根本的に間違っていると私は思うのである。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

肥満を恐れるな

校長 小川義男

新聞を読んでいて、面白い事実を知った。肥満者と痩せている人とは、肥満傾向の人間の方が長生きするというのである。アメリカの医学界で問題になっていることらしいのだが、数年前、我が国でも、このことが話題になっていた。

生命保険会社も、痩せている人よりは、むしろ肥っている人を積極的に勧誘するよう指導しているらしいとの噂も聞いた。

私事にわたって恐縮だが、実は私も肥ってからの方が、体調が遙かに良好なのである。高校時代の私が、山に登り、腕組みして裸で撮った写真があるが、まるまると肥っている。その後私は、次第に痩せて行った。山奥の代用教員の生活で、ろくに栄養が取れなかったためであろうと思う。大学時代は、貧しくて肥ることができなかつた。就職した後、貧しくて栄養が取れないということはなくなったが、どうしても肥ることができない。ひと頃体重が四十九キロだったのだから、この身長とは言え、痩せてガリガリと言える状況であった。他人に「精神的な顔」と励まされて、にんまりしたこともあったが、要するに半病人に近い状態だったのである。

この原因は、「慢性の盲腸炎」であった。医学的に慢性の盲腸炎はないそうだが、私の盲腸には石が一個存在しており、これが日々の健康を妨げていたらしいのである。肥りたくて、蜂蜜をなめたりするくらいだったのに肥れない。しかし、盲腸を手術した後は、めきめきと肥り始めた。かくして今日の「肥満体」になったのだが、しかし肥満体になってからの方が、体調は極めて良好なのである。

私のような肥満が好ましいわけでは決してない。しかし、痩せているより肥っている方が「死にくい」というのは何故なのであろうか。どうもそれは、肥っている人は「大飯ぐらい^{おおめし}」だが、痩せた人には「小食」傾向が強い。そのため、本当の体力がつきにくいのだと言う。

私も、少しでも「スマートに」なりたいたと、儂い抵抗を続けてきたが、どうもそれが長続きしない。年齢からは老人だと言うのに、朝から焼き肉やステーキを食べたがる老人は、世の常の「分別世代」

には珍しい傾向であるらしい。

風邪を引いたり、少しく体調を崩したりしたときに、私は大量の肉を食う。体力が忽ちにして回復するから不思議である。

女生徒に無理なダイエットを重ねている人が少なくない。テレビ局で、ある有名タレント女性の後ろ姿を見たことがある。びっくりするほどスマートであった。職業柄、克己心を持って体型の維持に努めているのであろうが、私は、あのような天才には、少しくらい体型が崩れても良いから、うんと食べて健康な体でいて欲しいと、秘かに思った。

女性が無理なダイエットを重ねるについては、男性の美意識にも責任がある。「腰が切れそうなほど」くびれている女性が美しいのではなく、はち切れそうな健康の中にこそ本当の美しさがある。高校時代は、生涯のため、その体力を形成、蓄積、保全すべき時である。「女生徒よ、もっとためらわず太れ、もっとどしどし飯を食え」と私は呼びかけたいのである。

問題は、人の顔を見るとすぐ「標準体重」「肥満傾向」などと口走りたがる医学界の傾向である。私は、この上なく医師を尊敬する人間だが、この点だけは、医師たちを信頼することができない。

実は1945年の敗戦以来、医師たちは様々に間違った「専門的見解」を流布させてきた。一つは「米食の危険」である。「米一升には、タオル一本分の繊維が入っている。こんな物を食べているから、日本人の体位体力は向上しないのだ。」こんな見解が大まじめに語られ、そのため「粉食」つまり、パンを常食にすることが勧められていたのである。今はどうか、「繊維の飲み物」さえ商品化される時代ではないか。

肉より魚をとという考えも、その出自はうさんくさい。肉の消費量が伸びるに従って、その国の寿命が延びているという統計もあるくらいだからである。

但し、間食はいけな。絶対にこれは改めた方がよい。その医学的理由もあるのだが、紙幅が尽きたので、これは別の機会に譲る。また、肉を食べるに際しては、必ず大量の野菜も取るべきである。このあたりは厳重に注意して欲しい。

最後に私の実感のひとつ。魚や納豆ばかり食べていると、どうも人間が大人しくなってくるようである。学問も実は戦いである。自分と異なる学説に、妙な理解を抱くようになっては、学問は成り立たない。反対学説と厳しく争うことによるのみ、学問は進歩することができるのである。

戦時中「攻撃精神」という言葉が強調された。勿論これは、戦意高揚のためだったのだが、私は今も、この「攻撃精神」を抱くことは、極めて重要だと考えている。学問は、攻撃に次ぐ攻撃の連続の中でのみ発展することができるからである。

肉が攻撃精神を生み出すとすれば、高校生も大いに肉を食い、大学入試という戦いに、駒を進めなければならぬ。女生徒も、他人がどう見るかなど気にせず、永い人生に対する体力形成のため、旺盛な食欲を身につけて頂きたいのである。なおカップラーメンは、攻撃精神にはつながらない。それは「低劣な肥満体」を生むだけである。



<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

入学式辞 (要旨)

校長 小川義男

ただ今 345 名の諸君の入学を許可致しました。今年の本校入学試験は、特段に合格が難しいものでありました。諸君が様々な困難を乗り越え、本日の入学を迎えられたことに心から敬意を表します。

昨年度の本校卒業生の大学進学実績は、以下の通りであります。

防衛大 3 東京工大 1 北大 1 山形大 5 埼玉大 5 千葉大 2 横浜国立大 2 首都大 2 信州大 1 東京海洋大 1 電気通信大 1 等、国公立大合格者総数 55 名

私立大学では、早稲田 11 慶応 2 上智 5 明治 38 青山 4 立教 25 中央 30 法政 49 日大 30 東洋 89 駒沢 22 専修 9 東京理科 34 帝京大医学部 1 獨協大医学部 1 東京薬科大 2 明治薬科大 6 昭和薬科大 1 東京農大 17 津田塾 3 東京女子 9 日本女子 16 同志社 5 立命館 5 関西学院 3 関西大 1

四年制大学合格者総数 910 うち、現役 832 浪人 78 となっております。なおその他については、短大 30 看護専門 29 一般専門 33 就職 2 であります。

以上先輩の実績はまことに輝かしいものでありますが、私は、本年入学された諸君の卒業時において、東大の複数合格、早稲田の 100 人合格を、何としても達成したいと考えております。すでに諸君は、七日間、毎日八時間の入学前特別指導に耐えて本日を迎えています。教職員全体と共に私は、今申し上げた目標を必ず達成すべく、諸君と共に全身全霊努力し続ける決意であります。諸君の奮闘を期待します。

諸君の中には、いわゆる専願として本校を第一志望に選び入学してきた人々がおります。唯一の学校として本校を選んてくださったことに、深く感謝致します。狭山ヶ丘高等学校は、決して諸君の信頼を裏切らないであります。

諸君の中には、本校を併願校として選び、幾つかの合格校の中から本校を選んで進学してきた人もおります。私は、最終的に諸君が本校に進学して良かったと確信できる日を作り出すため、全力を尽くす決意であります。「袖すり合うも他生の縁」と申します。袖すり合うどころか、師として弟子として共に三年を過ごすとは、何と深い縁(エシ)でありましょうか。

私事にわたって恐縮ですが、本校での私の生活は、平成 4 年春の、創立者近藤ちよ先生との出会い

から始まりました。近藤ちよ先生は、五十年以前、私財をなげうって本校を創立なさいました。ちよ先生ならびにご一族が、学校発展のためどれほど苦勞なされたかは、改めて詳しく諸君にお話して行きます。先生が創案なされた「自己観察教育」とは、黙想を通じて深く己を見つめ、自分の生き方を自分で発見させようとする教育、言わば「自分の中に自分の先生を見つける」教育であります。

本校の校訓は「事に当たって意義を感じよ」であります。勉強ばかりでなく、部活動や生徒会活動、ボランティア活動や、日常の小さな親切に至るまで、何事にも意義を感じて積極的に取り組む姿勢を確立して頂きたいのであります。

諸君は疑いもなく優秀な方々でありますから、将来社会的に必ず大成するであります。しかし、自らの資質を、自分の出世や蓄財のために用いるのではなく、他人の幸せのため役立てる人間に育ってください。フランス語にノブレスオブリージュという言葉があります。優れた人間には、自らの資質を、民衆や国家のために役立てる義務があるという意味であります。

昨今、人間の本質をエゴイズムであるかのようにとらえる傾向があります。しかし、このような考えは根本的に間違っております。その対象が父であれ、母であれ、妹や弟であれ、人は誰でも愛する人を持っております。その愛する者に危難が襲いかかったとき、人は誰でも、我が身の危険を忘れて、愛する者を救出するため突進するであります。人は、愛する者のため、我が命すら惜しまない特別な生き物なのであります。その愛の対象を、家族から友人へ、友人から社会や国家へと拡大して行って頂きたいのであります。英雄とは、自らに対する愛が、国家、社会への愛と完全に融合している人間を言うのであります。

すべての集団がそうであるように、本校には、諸君が守らなければならぬ校則があります。諸君の人間性を向上させ、学校生活を楽しく、充実させるための最低限度の校則であります。本校はこれについて、ゼロトランス、すなわち違反には容赦をしないという姿勢で臨みます。今日は、言い張りさえすれば、若者のどのような我が儘も押し通すことができる、社会精神、国民精神が衰弱した時代であります。だが本校は、そのように甘い学校ではないことを理解してください。諸君の人権を尊重し、諸君の成長のためにはどのような努力も惜しみませんが、反面本校は、校則違反を断じて許さない学校であることも肝に銘じておいて頂きたいのであります。この点、保護者の皆様にも、ご理解のほどよろしくおねがい申し上げます。理不尽な我が儘に対し、本校は絶対に妥協するものではないことをご承知おき頂きたいのであります。

昨今、学校は楽しいところでなければならないとの見解が支配的であります。しかし、学校は遊園地ではありません。確かに若さ溢れる諸君が集う学校は、楽しいところではありますが、それは、苦しみと共にでなければ存在できない、そのような楽しさであることを理解して頂きたいのであります。

保護者の皆様、お子さまは確かにお預かり致しました。私ども教職員一同、全力を尽くし、三年後、見事に成長した姿でお返しすることを約束致します。ご協力のほど、よろしくおねがい申し上げます。

本日は、入間市長木下博氏、県会議員齋藤正明氏、そのほか多くの皆様のご来駕を忝のうしております。ご多忙の中、ご臨席賜り、入学生の前途に錦上花を添えてくださいましたことに、深く感謝申し上げます。

さて、新入生諸君、前途は洋々としております。決意も新たに、躍進狭山ヶ丘の新しい担い手として、我々の戦列に加わってください。諸君と共に学ぶことは、我々教職員の最大の喜びであることを告げ、式辞と致します。